

1 学校教育目標

考える子（知） 心豊かな子（徳） たくましい子（体）

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	・学力の向上に取り組む学校	・居心地のよい学校づくりに取り組む学校	・体力向上に取り組む学校
○児童・生徒像	・考える子	・心豊かな子	・たくましい子
○教師像	・授業改善を推進する教師	・児童の可能性を引き出す教師	・子供と共に汗を流す教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

【学校】 創立40周年に落成された校舎は、白を基調としながら木材も多く取り入れ、明るく開放的で機能性にあふれている。広いワークスペースと中庭に隣接したランチルームや学校図書館、音楽室、そしてエアコンのある広い体育館は特長のある自慢の施設である。大雨の際には、所どころ雨漏りがあり、その都度対応している。令和3年度創立60周年を迎えた。校庭からの砂ぼこりや、冬季に北側校庭の不具合が課題である。

【児童】 立ち止まって挨拶をする、かかとを揃えて靴箱に靴をしまうなど、学校としての取り組みを身に付けた素晴らしい児童の集団である。授業中に返事をする、発言時に「～です」「～ます。」をつけて受け答えをすることが課題である。

【教師】 本校が初任校の教員が10名で、比較的若い組織である。研究や研修に真摯に取り組み、授業力の向上や教師力の向上に意欲的である。通勤時間が60分以上の職員が10名と、緊急時等に参集できる職員が限られていることが課題である。

【保護者・地域】 保護者や開かれた学校づくり協議会は学校に大変協力的である。

【前年度の成果と課題】タブレット端末を活用した授業が積極的に行われた。個別最適な学びや協働的な学びに向かった取り組みの推進が図られた。日々の授業の充実を第一として学力向上に取り組む、足立スタンダードに則った授業展開を推進する。自己肯定感や自己有用感を高めるために、今後も組織として取り組んでいく。「親和的なまとまりのある学級集団」を目指し、一人一人に目を配り、言葉掛けや教師の関わり方を工夫する。体力向上は引き続き課題である。新型コロナウイルス感染症の状況を冷静に判断し、外遊びの励行や体育研修による指導力の向上を図るように努力する。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R2	R3	R4	R5	R6
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	豊かな心の育成	○	○	○	○	○
3	健やかな体の育成	○	○	○	○	○

5 令和4年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
授業力の向上と基礎学力の定着率向上		令和4年度目標通過率 国語 80.0 算数 80.0 令和5年2月到達度確認テスト 国語 75.0 算数 75.0		4月:国語 81.2% 算数 81.5% 2月:国語 77.6% 算数 74.4%		4月の段階で目標値を超えることができた。 なお、 <u>学習の定着状況と具体的な取組は6(1)を参照</u>		◎	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象・実施教科	頻度・実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 新規	AIドリル (Qubena) 34年	34年 国算理社	通年 週2回以上	担任が、AIドリルのワークブックを、習熟の定着や宿題として配信する	実施回数 教師側の配信 や指示児童側の 取組度合	長期休業に、AIドリルを活用した補充教室を100%実施	3～6年生は全学年で長期休業中にAIドリルを活用する課題を課した。 AIドリル活用状況調査 ・日1回以上 45.32% ・週1回以上 80.72% ・月1回以上 96.20% ・平均回答数 814.1 と、全ての項目において区の平均値を上回った。	AIドリルの活用は十分できている。 AIドリルの活用が学力の向上にどのように関わっているのかを検証していく必要がある。	○
2 新規	AIドリル (Qubena) 56年	56年 国算理社 英	通年 週3回以上	担任が、AIドリルのワークブックを、習熟の定着や宿題として配信する 学習履歴を定期的に保護者に知らせる		AIドリルを利用し、効果的な学習ができたと回答した児童の割合 80%			
3 継続	週4回 朝学習	全学年 全児童 国語	8:25～8:45 年45単位 時間程度	担任が、新出漢字等の言語事項を指導する	原則年3回の定着度テスト	正答率 80%以上の児童が8割以上	言語・漢字項目の学級平均到達度が80%を超えていた学級 8学級(17学級中)	十分定着しているとは言えない。より丁寧に繰り返し指導していく必要がある。	△
4 継続	放課後 補習	個別指導を要する児童 国語・算数	1～3年 月曜日 4～6年 木曜日	担任・専科が、前学年までのつまづき等を解消するために、少人数で実施	定着度テスト	正答率 80%以上が8割	算数の学級平均到達度が80%を超えていた学級 11学級(17学級中)	学級到達度が80%に届かなかった学級においても、70代後半であったので一定の成果があった。	○

5 継続	授業力 向上	全教師 全教科	通年 各自最低1 回	全教員が模範授業の参観 を行い、自己の授業に活か す。報告書等で校内周知、 情報共有を図る。 ・中堅教員以上は模範授 業の実施と参観。 ・経験5年未満は、教科指 導専門員の指導を受け、 授業力の苦手を克服。	報告書 参観後の授業 観察	教員アンケート「自 らの学びが深ま り授業改善につ ながったか」肯 定的な評価が 80%以上	若手教員は教科指導 専門員による指導を 受けた。その際、全 職員に指導案の周知 と事後報告を行っ た。	若手教員に限らず、 授業力が不足してい る教員に対して継続 的な研修を行い、学 校全体の底上げを図 る必要がある。	○
6 新規	小中連携	全教師 全教科	年7回以上	教科研修会を設定し、定着 力の弱い単元について授 業改善を図る。分科会ご との学びを深める。 連携3校の授業案検討は、 C4th を活用する	結果実績	教員アンケート「小 中連携で、中学 校への学びの 連続の意識が 深まったか」肯 定的な評価が 80%以上	小中連携において分 科会に分かれ、島根 小主催の研究授業を 7本行った。	次年度も継続して取り 組んでいく。教員の中 から校内研究も充実さ せたいという意見が出 ているので、その点も 踏まえ検討していく。	○

重点的な取組事項－2		豊かな心の育成				
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果		コメント・課題	達成度
自己有用感を高める		大人になった時の夢や希望がある 自分のことが好き よいところがある についての肯定的評価80%以上	「自己肯定感」に関する項目(肯定群回答) 2年 77.6% 3年 75.3% 4年 78.4% 5年 78.5% 6年 72.3%		4年生以上は区の平均 を上回ったが、80%を超 えなかった。	△
B 目標実現に向けた取組み						
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果		コメント・課題	達成度
みそあじの徹底	みそあじを意識して実行した という肯定的評価、児童アンケ ートで85%以上	身だしなみ、掃除、挨拶、時間を守 る、の項目について、全校統一し て指導をする。	「基本的な生活習慣」に関する項目 (肯定群回答割合) 2年 88.2% 3年 82.4% 4年 95.5% 5年 94.9% 6年 87.7%		3年生以外は基準を達 成した。特に挨拶に関し ては自ら挨拶する児童 が増えてきている。	○
特別活動の充実	学校が楽しいという肯定的評 価90%以上	係活動、委員会やクラブ活動を充 実させる。 行事前後の学級指導	「学校は楽しい」に関する項目 (肯定群回答割合) 2年 90.7% 3年 96.5% 4年 96.6% 5年 88.6% 6年 83.1%		2～4年生は区の平均 値を上回った。 5・6年生に関しても80% は超えている。	○

読書活動の充実	年間読書冊数、全校で4万冊以上 図書貸出冊数、全校で2万冊以上	図書館支援員、副校長補佐、SSSによる、休み時間等の図書貸出の充実	年間読書冊数 約64000冊 図書貸出冊数 約26800冊	目標冊数を大きく超えることができた。次年度も継続して読書活動に取り組んでいく。	◎
体験活動の充実	体験活動が楽しいという肯定的評価 90%以上	出前授業の実施 遠足、校外学習の実施 自然教室の事前事後指導の充実	全学年で外部講師の出前授業を実施。「授業」に関する項目も肯定的回答が概ね80%を超えている。	次年度も体験活動の充実を図っていく。	○
問題行動等への組織的対応	学校が楽しいという肯定的評価 90%以上	QU 調査年 2 回、いじめアンケート年 3 回 校長による講話 生活指導主任による指導 担任による定期的な指導	「学校は楽しい」に関する項目(肯定群回答割合) 2年 90.7% 3年 96.5% 4年 96.6% 5年 88.6% 6年 83.1%	2～4年生は区の平均値を上回った。 12月末時点でいじめ報告件数は48件。うち解決数は27件。	○

重点的な取組事項－3		健やかな体の育成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
心と体の健康に気を付け、元気に遊び生き生きと生活する		東京都体力調査で男女別それぞれ、48項目で、区平均を上回る	1年 男 6/8 女 6/8 2年 男 6/8 女 5/8 3年 男 5/8 女 3/8 4年 男 6/8 女 6/8 5年 男 6/8 女 5/8 6年 男 5/8 女 5/8 ※各学年8項目中、区平均を超えた数	50m走・ソフトボール投げの項目で区の平均値を下回る学年が多い。走力・投力の育成が課題である。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
投力向上	5年生体力調査のボール投げの平均値 男子 21m、女子 14m	投力向上プロジェクト実施 体育の時間、休み時間	5年生 男子 19.0m 女子 11.9m (区男子 19.2m 区女子 12.4m)	達成基準に届かなかった。また、男女共に区の平均値を下回っている。	△
長なわ島根記録更新	R1 学校記録を上回る 全体で2946回	長なわ研修の実施 長なわ旬間の設定 短なわ旬間の設定	令和4年度 前期記録 2010 回 後期記録 2554 回	新記録の達成には至らなかったが、後期に記録を大きく伸ばすことができた。	△
食育の充実	一口目は野菜からの実施、6年生の割合 90%以上 R3 残菜率を下回る	校長の講話 担任による指導 栄養士による指導 給食室からの今日の一言 給食委員会の働きかけ	「一口目は野菜から」はほぼ100%実施できている。 残菜率 令和3年度 1.2% 令和4年度 2.3%(12月時点)	昨年度の残菜率を下回ることができなかった。年度末には 2%を切るようにする。	△

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

ア 学力向上アクションプランについて<重点的な取組事項－1>

【成果と課題】

- ・区の調査結果では国語・算数共に達成率を目標以上に高めることができた。しかし、区の平均と比べるとほとんどの学年が下回っている状況である。特に算数にその傾向が見られ、中でも6年生の算数の達成率は73.8%と他学年に比べて低い数値である。傾向として計算問題や数量関係問題は比較的良くできているものの、図形問題の正答率が極端に低い。

【対策】

- ・授業では、AIドリルを活用し、繰り返し問題に取り組みさせることで理解の定着を図る。また、問題文を理解するための読解力も課題となるので文のつながりや文章構成を意識して読む学習を通し、読み取ったことを整理し簡潔にまとめたり、自分の考えを広げたりすることを指導する。
- ・補習学習では、一律の課題にせず個々の児童に応じた課題に繰り返し取り組みさせることで、基礎的な力を育成する。
- ・個別指導では、担任だけでなく管理職や専科教諭も加わり組織的な対応で放課後等に個別に指導にあたる。

イ 豊かな心の育成について<重点的な取組事項－2>

【成果と課題】

- ・基本的な生活習慣の定着を図り、取り組んできた。児童のアンケートからも意識が高まっていることがわかる。
- ・自己肯定感の低い児童がまだまだ多い。また、いじめ問題や不登校問題など、どちらも発生件数を0にする事ができなかった。

【対策】

- ・重篤ないじめ問題は発生していないが、不登校問題と合わせて今後も組織的に対応し、児童の様子に目を配り、家庭や関係機関と連携を図りながら進めていく。
- ・道徳教育のより一層の充実と、家庭と連携しながら、児童の良い点を「認め」「褒める」ことを通し、自己肯定感をさらに高めていく。

ウ 健やかな体の育成について<重点的な取組事項－3>

【成果と課題】

- ・ここ数年で体力調査の数値は伸びてきており、学校としての取組に一定の成果があると言える。学校全体として投力が低いのが課題である。

【対策】

- ・体育の授業の指導法や内容を見直し、いかに児童の運動量を確保するかを真剣に考えなくてはならない。そのための研修を充実させていく。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

保護者や地域の皆様には、日頃より本校の教育活動にご理解とご協力をしていただき感謝しております。今年度も実施方法を工夫して運動会や学芸会などを実施いたしました。実施方法について色々課題はありますが、学校の様子、子供たちの頑張りを少しでもお見せすることができたのではないかと思います。今後も、その時の状況に応じコロナ禍においてできることを模索し、保護者や地域の皆様と連携しながら、児童の健全育成に努めていきたいと思っております。

(3) その他（学校教育活動全般について）

本校は長年、学力向上が課題となっていたが、ここ数年の取組で着実に力を着けてきており4月当初の区の学力調査では目標値を超えることができた。しかし、2月の調査ではほとんどの学級で達成率が下がってしまっている。学年により多少の傾向の違いは見られるが、4月同様、算数が十分定着していない学級が多い。今回の結果を基にしっかりと分析を行い、学力向上を図っていく。

ここ数年間は新型コロナウイルスの関係で、異学年交流を実施することができず、そこで培われるリーダーシップや他者理解・思いやりなどが十分に育成できなかった。そこで、次年度は特別活動の内容を見直し、縦割り班活動などの異学年との関わりをもつ機会を少しでも増やしていく。

